

【vol.75】メロディックマイナースケールを使ってみる ～その1～

どうも、大沼です。

今回から、メロディックマイナーの実戦編に入って行きたいと思います。

ハーモニックマイナーもそうですが、この辺りの、
マイナー系3種のスケールの知識を活用出来る様になると、
音楽の幅がグッと広がります。

世間では時々、「理論を学ぶと理論に捉われる」とか「理論を学ぶと感性が落ちる」
みたいな事を言う人々がいますね。

これはまあ、中途半端に学んでいると、そういう状態に陥らない事も無いんですが、
キチンと学べば、実際はそんな事はありません。

そういう人達は、メロディック、ハーモニックの両マイナースケール(モード)から
得られるダイアトニックコードや、メロディーの変化を扱えず、
大体がチャーチモードの範疇でしか音楽を構築できません。

要するに、ほぼ、メジャースケール、マイナースケール内のロジックに収まる
アレンジ、プレイくらいしか出来ない、という事ですね。

もっと極端な場合、知っているのはブルース系のプレイのみ(ぶっちゃけほぼペンタのみ)
だったり、特定の曲しか弾けない、と、そういう状態だったりもします。

ですが、この講座ですっと学んでくれているあなたには、
もうすでに、色々な音楽の世界が見えていると思います。

チャーチモードの知識の範疇では、12音平均律の12音の内、7音(+α)位を操るのが限界で
す。(※それが悪いわけではありませんが)

それが、ハーモニック、メロディックもわかっていると、楽曲の中で、12音ほとんどを
操れる素地が出来上がります。(※これも無理やり全部使おうとしなくても良いんですが
笑)

そうなってきたら、理論に捉われたり、感性が落ちる、なんてのは、
とんでもない話だ、と言う事を実感するはずです。

色々な知識を習得して、音の組み合わせの豊かな響きがわかる事は、音楽に接する事自体を楽しくするモノなので、是非、じっくりと取り組んでもらいたいと思っています。

では、実際にやっていきましょうか。

まず、メロディックマイナーを使う、となった場合、これまでに学んだ、メジャースケールやナチュラルマイナースケールの様な考え方で行くと、

キーがあって、スケールがあって、ダイアトニックコードがあって、その上で使うべきスケールが決まってくる、

と、言う話になりますね。

要するに、メロディックマイナーを使うべくして使う時(実質、特定のコードの上)がある、と。

なので、以前も載せましたが、もう一度メロディックマイナーのモード・スケールと、ダイアトニックコードの一覧を見ておきましょう。

キーは最近やっていた、key=Bm で見ていきます。以前までは、基本中の基本としてkey=Am で見ていましたが、他のキーでもアナライズ出来る様になる為に、違うものを使っていきましょう。

※B メロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

I mM7	BmM7	B メロディックマイナー
II m7	C#m7	C#ドリアン♭2nd
♭ III augM7	Daug M7	D リディアン#5th(リディアン・オーギュメント)
IV 7	E7	E リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)
V 7	F#7	F#ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	G#m7(♭5)	G#エオリアン♭5th(ロクリアン#2)
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	A#m7(♭5) or A#7(♭5)	A#オルタード・ドミナント

これまでの理屈で言うと、楽曲の中で、上記の様なコードが出てきた時に、メロディックマイナー系のスケールを使えば良い、と言う事になりますね。

ですが実際問題、一般的な音楽では、上のコード全てを均等に使う機会があるわけではなく、やはり赤字で示している、

- ・1度(I mM7、メロディックマイナー)、
- ・4度(IV7、リディア \flat 7th)、
- ・7度(VII m7(\flat 5) or VII7(\flat 5)、オルタード・ドミナント)

の、3種のコードとスケールを覚えておく事が、初期段階では重要なポイントになってきます。

で、今回は、メロディックマイナーについてやっていくわけですが、実際問題、メロディックマイナースケールをそのまま使う、と言う機会は、一般的な楽曲であれば、そこまで多くはありません。(※楽曲内部の割合としても)

出てくる場合でも一部分か、もしくはメロディックマイナー系のモードスケールとして、リディア \flat 7thやオルタードを使う事の方が多いかもしれません。

極端な言い方をしてしまえば、ジャズ、フュージョン系(他にはクラシックなど)か、そっち寄りの、音楽的に高度めなアレンジの時に、使う(出てくる)事が多いものです。(※意識的に多用しようとしなない限りは)

この辺りの「どのくらい使う(出てくる)ものなのか？」と言う話は、対象にするジャンルやアーティストによって大きく変わってくるので、ハッキリと断言できるものではないんですね。

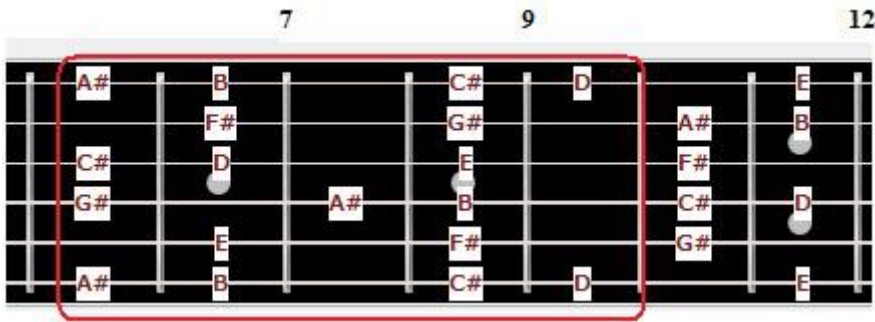
ただ、このテキストに良く出てくる『一般的な楽曲』という言葉のニュアンスは、『音楽の専門知識を持たない人々が、普段聴いているような曲』という感覚で使っています。

では、前置きはこのくらいにして、実際にメロディックマイナーを使う時はどうするのか？について見ていきましょう。

まずはメロディックマイナーの重要ポジションの復習からです。

今回はトニックをB音に設定しているので、Bメロディックマイナーですね。vol.70では、6弦トニック(ルート)のポジションはこの形を見ていました。

図、Bメロディックマイナー、6弦トニック

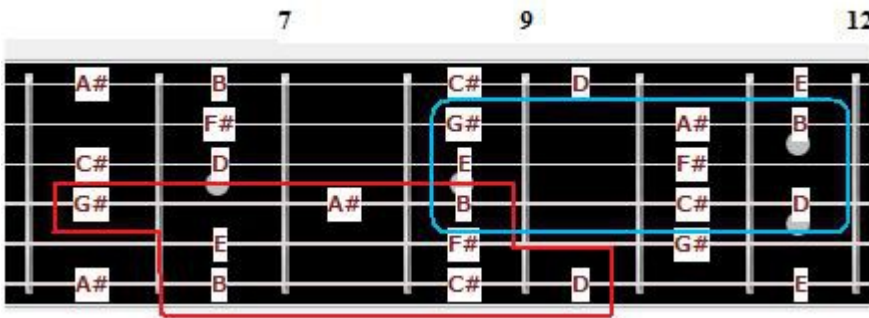


まずはこれを、真っ直ぐ上がったり下がったりできるようにしましょう。

で、以前も少しお話しましたが、スケールポジションを見る時は、1オクターブずつに分けて見てみると、トニックを中心にインターバルが把握しやすくなり、スケールの構造がわかりやすくなります。

上の6弦トニック周辺のパポジションでは、「6弦のB音から1オクターブ分」と、6弦のB音から1オクターブ上の「4弦のB音から1オクターブ分」とスケールを分けると、特に把握しやすいですね。

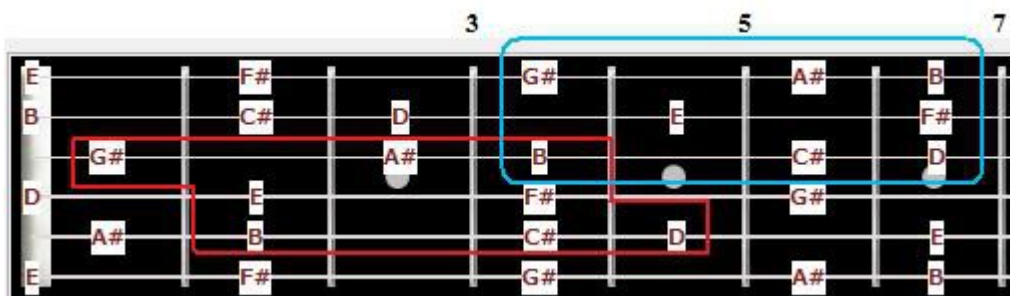
図、Bメロディックマイナー、6弦&4弦トニック、1オクターブ



このポジションの見方だと、青枠で囲った、4弦トニックの1オクターブの形は、メロディックマイナーとしてはかなり弾きやすいものだと思います。

同じ様に、5弦、3弦のポジションも見てください。

図、Bメロディックマイナー、5弦&3弦トニック、1オクターブ



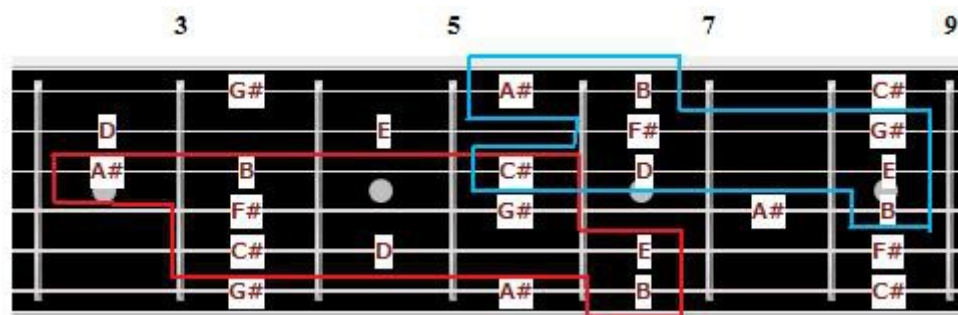
こちら音の並び的に、3弦トニックのポジションが弾きやすくなっています。

あるスケールを覚えた時に、6~1弦まで全てを使ったポジションで練習するのも必要な事ですが、この様に一定の範囲でポジションを分解してみると、スケールの違った姿が見えてきたりもします。

後は、また別の話になりますが、通常、スケールはトニックの位置を基準に、ヘッド側からボディ側に音列を見ていく場合が多いですね。

ですが、それとは逆に、ボディ側からヘッド側にも見ていく事が出来ると、また視界が広がり、フレージングに幅が出せます。

図、Bメロディックマイナー、6弦&4弦トニック、1オクターブ



これは、慣れていないとパツとは弾けないんですが、トニックに設定した音から、こちら側(ヘッド側)にもインターバルの配置が見えると、指使いの幅が広がりますので。

今回はメロディックマイナーで見っていますが、これまでに学んできた色々なスケールでも同じ様な事を試してみてください。

さて、ポジションも確認したところで、実際にスケールを使っていきましょうか。

まず、最初に載せた、ダイアトニックコードの一覧を見てみると、メロディックマイナースケールから構成されるコードは、『XmM7(Xマイナー・メジャー7th)』ですね。

マイナー・メジャー7thコードは、マイナー・トライアド(root、m3rd、P5th)に、M7thを加えたものです。

メロディックマイナーのインターバルが、

tonic(root)、M2nd、m3rd、P4th、P5th、M6th、M7th

と、なっているので、この様なコードが出来上がるわけですね。

XmM7 コードの代表的なヴォイシングとしては、以下の様なものが挙げられます。

今は設定しているトニック(ルート)がB音なので、BmM7 のコードですね。

譜例、BmM7

Musical score for BmM7 chord in 4/4 time. The score shows a treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 4/4 time signature. The first measure shows a quarter note G# with a fingering of 1. The second measure shows a quarter note B with a fingering of 2. The bass clef part shows a 7-7-8-7 fingering for the two measures. The dynamic marking is *mf*.

弾いてみるとわかるように、結構、響きが暗く、一般的な楽曲では、このまま使うのが少し難しいコードです。

ポップスなどで、このコードがいきなりポンと出てくる事は少ないのですが、比較的目にするのが、クリシェ・ラインで出てくる場面ですね。

譜例、クリシェ・ライン(Bm-BmM7-Bm7-Bm6)

Musical score for a cliche line: Bm-BmM7-Bm7-Bm6. The score shows four chords in a row: Bm, BmM7, Bm7, and Bm6. The bass clef part shows a 7-7-7-7 fingering for the four chords.

『クリシェ(cliche)』はフランス語で、『ありふれた、型にはまった』様な感じの表現を意味します。(※『常套句』などとも訳されますね)

要するに、“以前(過去に)あったものと同じ様な、ありふれたもの”を否定的なニュアンスで示す言葉ですが、音楽用語としては、『同じ(様な)コードが続いて、その中の内声を動かしていく技法』の事をクリシェ・ライン(or ライン・クリシェ)と呼びますね。

もしくは、上記の様な技法が、音楽ではホントに良く使われるので、『常套句』としての意味で『クリシェ』と呼んでいる、なんて話もあります。

で、見ての通り、上の譜例では、Bm を基本に、内声が順次動いているわけですね。

統計が取れるわけでは無いので断言は出来ませんが、通常、XmM7(的な)コードは、このクリシェ・ラインで目にする事が多いのではないかと思います。

ならば、リードプレイ寄りの考えで、スケールとしてのメロディックマイナーは、このクリシェの中で使うのか？と言うと、XmM7 の鳴っている時間が短いので、わざわざ切り替えたりは(あまり)しないわけです。

もちろん、無理やり使おうとすれば、使えない(入れられない)事もないですし、アドリブソロみたいなものではなくて、楽曲のメロディーラインの構築としては、普通に使えます。

ですが、この手の進行は、「ここはメロディックマイナー系のものでどうしよう」と言う意図で出てくるものでもないので、ちょっと方向性が違いますね。

じゃあ結局、主にどこで使うのか？と言うと、大きく分けて、『ジャズ系の奏法ロジック(解釈)をベースにしたプレイ』と、『メロディックマイナー系のモードとコードのアレンジ(とその中でのプレイ)』の2つになります。

この内、『アレンジ』の方は、一般的には多用するものでもないですし、解説しようとする文章がものすごい量になるので、このテキストでは扱いません。

なので今回は『ジャズ系の(解釈をベースにした)プレイ』の、主に『ソロの弾き方』に寄った譜例を見ていきます。

この辺りがわかれば、ほぼ、困る事もないはずなので。

ではまずは、メロディックマイナーから XmM7 のコードが構成される、と言う事で、『マイナー・メジャー7th のコードトーン・アルペジオ』のパターンをいくつか覚えていきましょう。

譜例、BmM7、コードトーン・アルペジオ(5弦ルート)

BmM7

T
A
B

2 5 4 3 4 3 2 6 7 6 2 3 4 3 4 5 2

小 小 小

普段、小指をあまり使わない人は、2小節目の頭前後の小指の部分がキツイかもしれませんが、この譜例をそのまま使うわけでもないので、ゆっくりと弾いてみてください。
 (※もちろん、そのまま使っても良いのですが。)

ストレッチがキツイ場合は、オクターブ上げて弾くか、トニックをD~E 辺りに変えてみると弾きやすくなると思います。

譜例、BmM7、コードトーン・アルペジオ(6弦ルート)

The image shows a musical score for a BmM7 chord tone arpeggio. It consists of a treble clef staff with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature. The melody starts at measure 6 and ends at measure 8. Below the staff is a guitar tablature (TAB) with fingerings: 7-10, 9-8-9, 7-7-6, 7-6-7, 7-9-8, 9-10, 7. Underneath the TAB, the characters '人 中 人 中 人 中 人' are written, indicating fingerings for the strings.

こちらにも3~1弦の音の配置にクセがあるので、指使いを載せました。
 これらが基本中の基本の動きになるわけです。(※指使いは一例です)

で、楽曲中ではこのアルペジオをそのまま使っても良いですし、一部を抜粋したり、構成音の中(≒スケールポジションの中)で動いてみたりしてもいいですね。

譜例、BmM7コードトーン・アルペジオ、Bメロディックマイナースケール (※6弦ルート(トニック)ポジション周辺のフレーズ)

The image shows two musical examples. The first example is a BmM7 chord tone arpeggio starting at measure 13, with a treble clef staff and a key signature of one sharp. It includes a triplet of eighth notes at measure 13 and a triplet of eighth notes at measure 15. The tablature below shows fingerings: 8, 9-9-7-8, 7, 9-6-9-8-7, 8. The second example is a B melodic minor scale starting at measure 16, with a treble clef staff and a key signature of one sharp. It includes a triplet of eighth notes at measure 16 and a triplet of eighth notes at measure 17. The tablature below shows fingerings: 9-7-9-9-7-7-8-9, 6-7, (7)-6-7-7-9.

現実問題としては、XmM7のコードがこんなに長く続く事は、ほぼ無いと思うので、例えばスケール(アルペジオ)内では、こういう動きも出来る、と言う例になります。

この譜例は4小節続いていますが、フレーズとしては2小節で一塊ですね。

こんな感じで1~2小節の範囲で収まるメロディックマイナーのフレーズを作って練習してみるのも良いと思います。

後、ジャズの論法では、Xm7コードの上で、Xメロディックマイナーを使う、と言う技法があるのですが、その場合、コードではm7thが鳴っているけども、スケール(メロディ)ではM7thを鳴らすのですね。

譜例、Bm7上でBメロディックマイナー

The image shows a musical score for a Bm7 chord. The score is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a time signature of 4/4. The melody starts at measure 20 and ends at measure 21. The notes are B2, C3, D3, E3, F#3, G3, A3, B3. The guitar tablature below shows the fret numbers: 9, 7, 6, 9, 8, 8, 8, 9. The chord is Bm7, and the scale is B melodic minor.

この様に弾くと、M7thの音が独特のアウト感を醸し出すので、ジャズではメロディックマイナーが結構使われるわけです。(※基本的にM7thは長く伸ばさない)

さて、長くなってきましたので、今回はここまでにしておきましょう。

内容をまとめると、

- ・メロディックマイナースケールの重要ポジションの復習
- ・メロディックマイナーから構成される、XmM7コードの基本
- ・マイナー・メジャー7thのコードトーン・アルペジオ
- ・メロディックマイナー単体での譜例

と、こんな所ですね。

この辺りの知識があると、楽曲の中でメロディックマイナーのフレーズが出てきても、必要十分な分析が出来るはずです。

今回は、メロディックマイナーを他のスケールと対比させて、もう少し発展的な奏法口
ジックを考えてみたいと思います。

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼